

技術開発全体計画

北海道森林管理局

課 題	天然更新カンバ類の効果的保育手法の確立				開発期間	令和元年度～令和20年度 2019年度～2038年度（20年間）	
開発箇所	上川南部森林管理署 3林班ほか	担当 部署	森林技術・支援センター	共同研究 機 関	森林総研 北海道支所	技術開発 目 標	3
現 状 問 題 と 点	<p>北海道国有林における人工林の約6割（45万ha）を占めるトドマツについては、主伐対象となる齢級に達しつつある。このような中、自然状況に応じ、天然力を活用した施業を主体とした育成複層林へと誘導等が森林の有する公益的機能の発揮の観点から求められているとともに、主伐後の再造林についてはコストを要することから、地がき処理によるカンバ類を主体とした天然更新は有効な手法と考えられる。地がき処理を行うことによって発生したカンバ類については、大型草本等による被圧を受け、その後の生育が芳しくないものも見受けられるとともに、台風等による風倒被害の跡地においても、天然更新により発生したカンバ類が一斉林の様相を示しているものの、そのまま放置すれば林分としての衰退を待つだけの状況のものも見受けられる状況にある。現状を踏まえると、天然更新により発生したカンバ類を適切に保育するための刈り払い・除伐作業の効果的・実用的技術開発が必要と考える。</p>						
開発目的 (数値目標)	天然更新により発生したカンバ類を主体とする若齢林分を対象とした効果的な保育手法の確立						
開発方法	<p>①広葉樹稚樹を主体とした林分での保育方法の開発 地がき処理を行った人工林主伐跡地において発生した、カンバ類を主体とする広葉樹稚樹の成林を図るため、クラッシャー等を用いて大型草本等を刈り払うとともに、稚樹からの萌芽更新を促進。 ※無作業（対照）区、刈り払い区（刈り高を30cm・60cm程度に設定）の比較</p> <p>②広葉樹若齢林分での保育方法の開発 風倒被害跡地において天然更新により発生した若齢カンバー斉林において、クラッシャー等で筋状の除伐を行い、残存木の成長を促進させる。 ※無作業（対照）区、除伐区（残し幅を1m・2m程度に設定）の比較</p> <p>③広葉樹林分での間伐方法の開発 ④広葉樹保育事例の収集及び整理</p>						
年 度 別 計 画	区分	令和元年度	令和2年度	令和3～6年度	令和7～19年度	令和20年度	
	①広葉樹稚樹を主体とした林分での保育方法の開発	○試験地設定及び調査	○成長量調査 ○クラッシャー等による刈払及び萌芽更新補助作業	○令和3年度中間報告 ○令和3～6年度成長量調査	○令和8・13・18年度頃に中間報告	令和20年度 ○完了報告 ○分析、取りまとめ	
	②広葉樹若齢林分での保育方法の開発	○試験地箇所の選定 ○開発期間の延長	○試験地の設定及び調査	○令和3年度クラッシャー等による除伐作業及調査	○成長量調査 ○中間報告年に成長量調査		
	③広葉樹林分での間伐方法の開発	○過去の広葉樹保育事例の収集及び間伐方法の検討					